

Nolhac, Pierre de

La Dauphine Marie-Antoinette.

Paris, Boussod, Valadon, 1896. (文献番号11-122)

La Reine Marie-Antoinette.

Paris, Boussod, Valadon, 1890. (文献番号11-119)

ノラック著

王太子妃マリ・アントワネット および マリ・アントワネット王妃

19世紀末のパリで出版されたマリ・アントワネットに関する2著。著者のピエール・ド・ノラック(1859-1936)は、パルナシアン派の詩人であり、ロンサールやペトルルカに関する文献も残しているが、彼はまた同時に、ヴェルサイユ城の学芸員で、歴史家でもあった。ここで紹介する2冊の他にもヴェルサイユ宮をめぐる人々を扱った文献として、『ルイ15世とマリ・レチンスカ』(1900年)を著しており、1922年にはアカデミー・フランセーズ会員になっている。本館所蔵の『王太子妃マリ・アントワネット』は1000部限定版中の666番、『マリ・アントワネット王妃』は、50番限定中の36番で、ともに稀観本としての価値は高い。前書の内容は5章からなる。第1章は「マリ・アントワネット以前のルイ15世時代の宮廷」、第2章「マリ・アントワネットの結婚」、第3章「ショワズル公爵の失寵」、第4章「マリ・アントワネットとデュ・バリ夫人」、第5章「王国の終焉」と題されている。後書は、第1章「マリ・アントワネット王妃」、第2章「宮廷とお祭り騒ぎ」、第3章「マリ・アントワネットの私生活」、第4章「小トリアノン宮」からなる。史料には書簡などの未刊行史料もかなり取り上げられ、どちらかというと前書は宮廷生活の公的場面でのマリ・アントワネットを、後書は私的な場面での彼女を描いている。王家に対するフランスの歴史家の評価は、時の政治体制により、また歴史家の史観や政治的立場により変化するが、ノラックは、政治的関心というより、単純に、宮廷人を描写するということに興味をもったようで、歴史記述のスタイルとしては、マリ・アントワネットがさまざまな状況において、どのような態度をとったか、何を話したかを再現するような書き方である。共に著名な画家の下絵による美しい銅版画挿絵が25枚ほど(内1枚は手彩色)入った豪華本である。

図は王妃マリ・アントワネットの玉璽 1771年
(初刻印からの復元) (齊藤)

